

十二月中旬の冬日和、思い立って高尾山に出かけた。家籠りに辟易したせいか、妻の一家言もなく、当然の如く昼のおにぎりが準備され車が発進する。高尾山口到着は三十分程とか、ナビのお姉さんにお任せしよう。あつという間に到着する。甲州街道から八王子を抜けてと想像したこちらの先入観とは裏腹に、中央高速の国立インターから十八キロでしかなかったのだ。

山はがらから、例年の混雑の記憶とは程遠く、谷川や冬枯れの風情を味わいつつ蕎麦や甘味の店が並ぶ通りを、清滝のケーブルカーに向かう。我々は頂上で寒風に吹かれて弁当をひろげるのだろうか、と思った途端「おにぎりは晩にして」と、示し合わせた様に、余裕綽々の蕎麦屋の四人掛け対角線席に案内され、温かい自然薯そばを堪能する。熱いほうじ茶をお替りまでして、隣の店の蒸籠からホカホカ饅頭を二個貰い満足感に満ちてケーブルカーの車上の人となる。

トンネルを出て上に向かう。遠景の山々に紅葉を落とした飴状の楓の樹々、冬もいいな、とスマ木を向けたのも束の間、あれーっ、行く手は、いろはもみじの赤や、椽などの輝く黄葉に囲まれ、真っ盛りの秋景色、シャッターを切るどころか、連射の世界である。お粗末な想像力故に今度は嬉しくも、またもや裏切られる。

薬王院へは男坂を歩く。何十段の石段もスイスイ行こう、と駆け上がったまでは良かったが、足の痛みと息切れに兩人揃って石段にへたり込み小休止の体たらくである。八十路を超える「体力と気力」を思い知らされる一大発見であった。

寺の周辺の崖は杉の巨木に護られてか、先程の感激を倍加するような、しっとりとした真紅や、午後の陽に輝く黄葉に満ち溢れている。頂上への道々、歩き出した時とは全く違った精神状態で地を踏みしめる自分が居た。陽が傾きかけ、富士の嶺と金時山が同じ高さに並び、乱れ雲が景を引き立てる。「高尾山を甘く見ない様、先月も三件の救急搬送がありました」アナウンスが山中に響いていた。